パソコンは家族の一員になれるか



酒井俊彦（プロダクトデザイナー）



佐藤豊彦（イラストレーター）



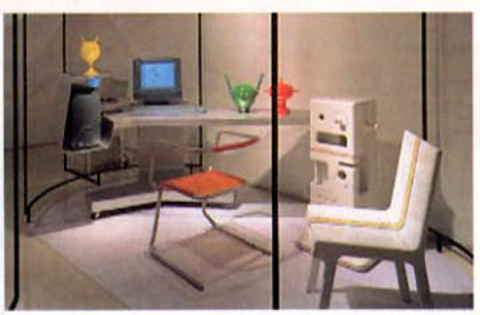
半谷仁子（建築家）



ボルト・ナッツ（グラフィックデザイナー，中川憲造，長崎久美子，延山博保，森上暁，津谷澄子5氏のグループ）



津田晴美（インテリアプランナー）



アー・ツエット・ベー（家具デザイナー，大橋智晃，綾工事貴麿呂両氏によるユニット）

家庭のインテリアの中で，どうにも座りの悪いのがコンピューター。漆外装のマックなどもお遊びとしてはあるが，やはり情報機器としての外観上の冷たさは，寛ぎの空間にしっくりこない。市販の専用ラックの多くもオフィス・ユースねらいで，ありていに言えば，そっけない。

“部屋置きパソコンの快適な形”を目指して11人のデザイナー，建築家が立ち上がった。東京・新宿にあるリビングデザインセンターOZONEでは「パソコンの部屋展」を6月25日まで開催している。

グラフィックデザイナーの中川憲造氏ら5人のグループ「ボルト・ナッツ」は，マック画面上のアイコンなどを意匠に取り入れた机。ファイルホルダーのアイコンをそのまま引き出しのモチーフにするなど，本来認識の道具として画面に取り込んだものを再び机上に取り出して「逆バーチャル」を楽しませてくれる。

建築家の半谷仁子氏が提案した二つの作品は，女性の家庭内での行動をうまく形に表したもの。キッチンワゴンのようなパソコン収納具には，大きめのキャスターが付き，移動も楽々。夕げの支度をしながら「ちょっと…」など，あちこちに引っ張りまわして使えるのがユニークだ。たたむと，モダンな小鏡台になるタイプは，インテリアにさりげなく溶け込む。

このほか，会場には合計6点の作品が展示。6月20日には「ボルト・ナッツ」，半谷氏に加え酒井俊彦（プロダクトデザイナー）氏，佐藤豊彦（イラストレーター）氏によるトークセッション「これからのパソコンと住まい」も開催された。

かつてテレビにも家具調タイプ全盛期があり，ブラウン管正面に立派な木製扉を付けたものすらあったと記憶する。また使い手も，インテリアに馴染ませるために見ないときには布を掛けるなど，現代から見ると思わず微笑んでしまうような努力をしていたものである。“電脳”という新しい家族は，住空間にどのように馴染んでいくのだろうか。（下田）